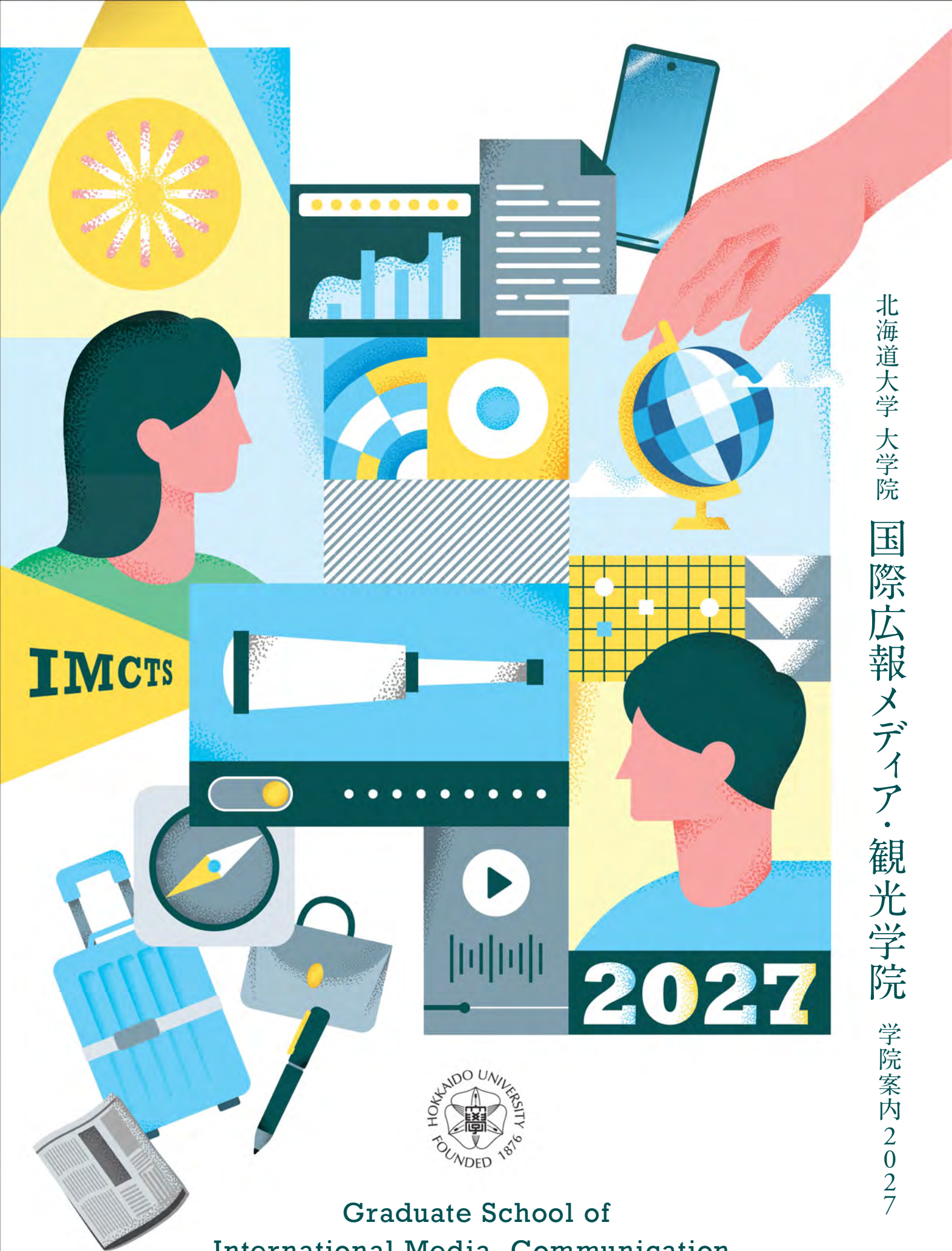




北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院

学院案内 2027



Graduate School of
International Media, Communication,
and Tourism Studies

「メディアと観光の融合」が生み出す越境知



情報と移動の意味を学際的にとらえ直す 理論と実践、社会との共創で新たな価値を創造

現代社会はSNSとAIの時代に突入し、情報の量と質が大きく変容しています。世界が瞬時につながり、人びとの移動や交流もかつてない速度で広がっています。情報が人を動かし、人の移動が社会を変える時代のなかで、「メディア」と「観光」が持つ意味と役割が日々問い直されています。

不確実性が高まり、従来の常識が大きく覆される時代において、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の学術的意義と社会的役割は、いっそう重要になっています。本学院が「メディアと観光の融合」を教育研究の中核に据えていることこそがその理由です。

本学院では、メディア・コミュニケーション研究、観光研究、地域研究、さらには隣接する多様な研究領域を接合し、現代社会を多角的に読み解く力を育みます。あふれる情報を批判的に分析する力、地域や文化の価値を多面的に把握する力、国際的視野から課題を発見し解決する力、理論を社会の現場で検証し直す力、そして研究成果を社会へ還元する構想力。これらを総合的に養うことで、単一の視点では見えにくい社会の構造や地域の可能性を学際的にとらえ直す「越境的な知」を創造します。

教育・研究は、大学院の内側だけで完結するものではありません。本学院では、企業や自治体との連携、地域や社会現場での学びを通じて、理論と実践を往還する教育・研究を展開しています。現実の社会課題に向き合いながら、学生、教員、メディア、観光産業、シンクタンク、自治体、地域住民がともに問いを立て、新たな価値を生み出していく。そのような社会との「共創」こそが、本学院の学びの根幹です。



北海道大学附属図書館

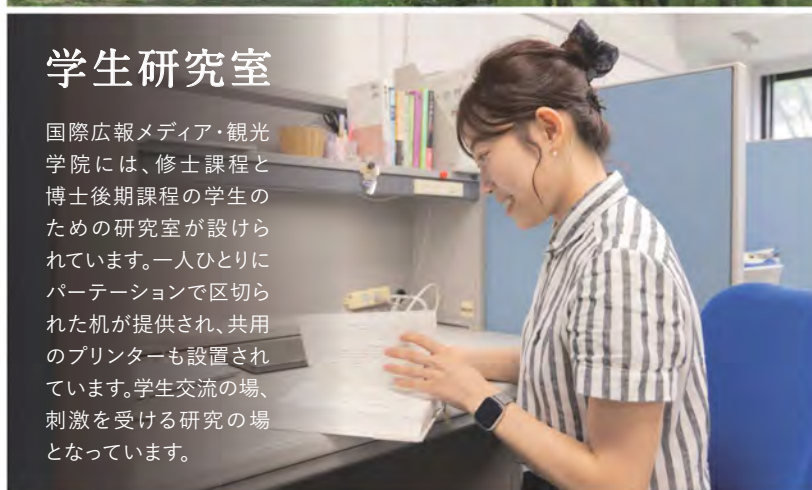
1876年、札幌農学校の開校と同時に設置された「書籍室」が始まりで、初代館長は新渡戸稲造。本館と北図書館および各部局図書館から成り、国際広報メディア・観光学院は、グループ学習室が備わった北図書館の目と鼻の先にあります。論文や新聞など各種データベースや電子ジャーナルも充実しており、自宅にいらなくてもアクセスできます。





学生研究室

国際広報メディア・観光学院には、修士課程と博士後期課程の学生のための研究室が設けられています。一人ひとりにパーテーションで区切られた机が提供され、共用のプリンターも設置されています。学生交流の場、刺激を受ける研究の場となっています。



沿革

- 2000年4月 ● 北海道大学言語文化部、留学生センター、情報メディア教育研究総合センター（国際コミュニケーション分野）を母体として「大学院国際広報メディア研究科」が発足。
- 2002年4月 ● 博士後期課程がスタートし、高度な専門研究を実践する研究者の育成が始まる。
- 2006年4月 ● 観光学高等研究センターが創設され、北大における観光研究が本格的に開始される。
- 2007年4月 ● 「国際広報メディア研究科」から「国際広報メディア・観光学院」に組織機構及び名称を変更。新たに観光学高等研究センター所属教員を教育スタッフに加えた「観光創造専攻」が誕生し、「国際広報メディア専攻」と「観光創造専攻」の2専攻体制になる。
- 2019年4月 ● 国際広報メディア・観光学院が1専攻化。

学院の特徴

観光メディア人材像

修士課程

- 1専攻2コース体制で幅広い専門領域に対応
- 社会ニーズに応じた専門科目を各コースごとに設置
- コース横断的な共通科目(講義科目)を選択必修で履修
- コース融合専門科目(演習科目)によりメディアと観光の融合領域に即応
- 文系融合、文理融合、企業連携による多様な授業

博士後期課程

- 研究職、専門職など多様な人材を育成
- 博士論文(国際広報メディア・観光学特別研究)以外に研究実践科目とキャリア実践科目を選択必修化

1 情報を検証し、事実を見極め、社会に発信できる人材

社会やデジタル空間にあふれる情報をうのみにせず、その根拠や背景を検証し、虚実が入り乱れる情報環境のなかで事実を見極め、公共性のある情報を社会的に発信できる人材。

2 AI・SNS時代の情報と移動を読み解く人材

AI、SNS、デジタルプラットフォームによって変化する情報環境と、人の移動・交流が社会に与える影響を総合的に理解し、現代社会の課題を読み解く力を持つ人材。

3 メディアと観光を横断的に結びつける人材

メディア・コミュニケーション研究と観光研究を別々の領域としてではなく、相互に関係する分野として捉え、情報発信が地域イメージを形成し、人びとの移動や文化交流を促すプロセスを総合的に分析できる人材。

4 多文化共生と越境的交流を推進できる人材

多様な言語や文化が交差する現代社会において、多文化共生を支え、地域や国境を越えた交流、協働、相互理解に貢献できる人材。

5 社会課題を現場から発見し、解決へ導く人材

人口減少、観光と地域生活の調和、情報格差、社会分断、異文化理解などの課題を、現場での調査や対話を通じて発見し、解決に向けた構想を提示できる人材。

6 地域をデスティネーションとして構想できる人材

地域を観光目的地として、地域の内側と外側の視点から捉え、訪れる人にとっての魅力、地域住民にとっての価値、地域の未来を見据えた観光のあり方を総合的に構想できる人材。

7 メディアを活用して地域の魅力と課題を発信できる人材

映像、SNS、ウェブ、出版、広告、イベント、データなど多様なメディアを活用し、地域の魅力だけでなく課題も含めて国内外に発信し、地域と関わる人びとの広がりや異文化理解の促進に貢献できる人材。

8 企業・自治体・地域住民と協働し、社会と共創できる人材

大学院内の学びにとどまらず、観光によるまちづくりや地域活性化を進めるために、企業、自治体、メディア、観光産業、地域住民など多様なアクターと協働し、社会との共創を通じて新たな価値を生み出せる人材。

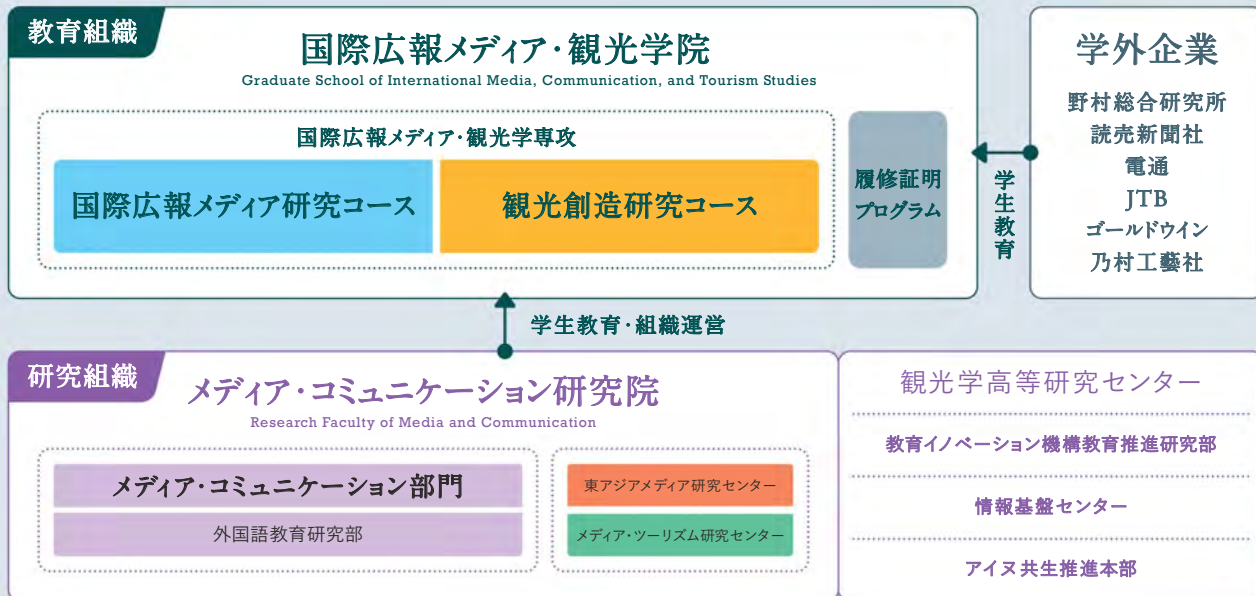
9 深い専門知と幅広い総合知を兼ね備えた人材

国際広報、公共ジャーナリズム、言語コミュニケーション、メディア文化、観光文化、交流共創、観光地域経営、国際観光開発などの専門知を深めると同時に、分野を越えて課題を捉える総合知を備えた人材。

10 地域と世界の未来を構想する越境的な人材

理論と実践、地域と世界、メディアと観光、専門知と総合知を越境的に結びつけ、持続可能で多文化が共生する社会の実現に貢献できる研究者、実践者、表現者。

学院組織図



観光創造 研究コース

国際観光開発専門科目
観光地域経営専門科目
交流共創専門科目
観光文化専門科目

コース融合専門科目



理念・実践・共創の視座

「観光創造研究」という名称には、観光／ツーリズムを狭義の観光学に閉じ込めず、理念・実践・共創として捉える本コースの視座が込められています。本コースでは、社会学、人類学、地理学、文化研究、経営学、歴史学、メディア研究、芸術学、政策研究など多様な学問領域を横断し、観光が生み出す移動、交流、地域、文化、環境、開発の諸課題を探究します。そのため、本コースの教育研究領域は相互に緩やかに結び

ついており、学生は自らの関心に応じて領域横断的に学びを深めることができます。

2007年の開設以来、「観光創造研究」という言葉に込められた意味と内容は、本コースに関わってきた多くの教員や学生の研究・教育活動を通して、具体的かつ豊かに育まれてきました。この理念に共鳴し、新たな可能性を切り拓いていく意欲ある皆さんの参加を心よりお待ちしております。

メディア観光論演習

◆ Tourism, Media and Thought

観光マーケティング論演習

観光地域ビジネス論演習

文化越境論演習

ポピュラー文化論演習

公共社会論演習

国際交流論演習

◆ 言語社会論演習

言語コミュニケーション論演習

◆ 言語研究方法論演習

言説分析論演習

言語応用論演習

◆ Film and Tourism

◆ 英語ディプロマ・プログラム対象科目

国際広報メディア 研究コース

メディア文化専門科目
言語コミュニケーション専門科目
公共ジャーナリズム専門科目
国際広報専門科目

主な開講科目は
同ページ下部に記載しています。



学際領域研究における学び

本学院は学際的領域を研究対象とし、理論的、実践的教育を進めています。本研究コースの専門科目としては、「国際広報専門科目」「公共ジャーナリズム専門科目」「言語コミュニケーション専門科目」「メディア文化専門科目」がありますが、本研究コースの科目を軸として、観光創造研究コースの科目も踏まえて学ぶ学際的研究を推奨しています。

たとえば「Instagramにおける観光マーケティング」を

研究したい場合、広報論やメディア論を主軸科目とし、観光学を踏まえながら学ぶことになるでしょう。単独科目では見えにくい社会的問題を見つけ、解決の糸口を探っていくのです。また本研究コースは連携企業による実践的教育を積極的に進めており、日本を代表するシンクタンク、広告企業、新聞社の経験豊かな講師による授業が人気を博しています。このような豊かな学びの中で、皆さんの大きな問題意識が解決されることを願っています。

コース融合専門科目

本学院の最大の特徴は、観光とメディアの融合にあります。このため、国際広報メディア研究と観光創造研究をつなぐ融合領域研究として、「メディア観光論演習」「ポピュラー文化論演習」「Film and Tourism」「情報戦略論演習」など多様な演習授業が設置されています。

主な開講科目 (すべて2単位)

情報戦略論演習

サービス産業広報論演習

デジタル・コミュニケーション論演習

広報・広告産業論演習

マルチメディア表現論演習

International Public Relations

国際広報専門科目

問題意識受け止める「技のデパート」

国際広報専門科目には現在6名の専任教員がいます。これらの教員の専門は多岐にわたり、皆さんは、経営戦略論、経営組織論、観光マーケティング論、地域経済学、社会調査法などを学ぶことができます。特に経済・経営・商学領域で実証系／実践系研究であれば、定量系・定性系にかかわらず、ほとんどの問題意識が受け止められると思います。まさに「技のデパート」です。所属学生の近年の研究キーワードの一部を紹介すると、「SNSと消費者行動」「位置情報ゲームの利用意図」「観光レビューの感情分析」「広告における拡張現実(AR)技術」「北海道におけるスタートアップエコシステムの再検討」「行政広報におけるチャンネル最適化戦略」などです。一緒に有意義な学びの中で問題意識を解決していきましょう。

主な開講科目(すべて2単位)

国際経営論演習Ⅰ(経営戦略)
国際経営戦略広報論演習
広報企画論演習
組織コミュニケーション論演習

Student's Voice

博士後期課程1年
サキハマ セイ
崎浜 星 さん

働きながら、子育てしながら学べる環境

私は社会人として働きながら子育てをしつつ、博士後期課程で宿泊業の今後の在り方について研究しています。本学院には、裾野の広い観光領域を横断的に学べる学際的な環境があり、多様な状況にある学生も学びを続けられる制度が整っている点に惹かれ、進学を決めました。専門性の高い先生方が多く、研究相談にも真摯に向き合ってください点も魅力です。研究を通して社会をより深く見つめたい方にとって、挑戦を後押ししてくれる場所だと思います。

教員紹介 Faculty Profiles

ナカ ガワ サトル
● 中川 理 教授

担当：国際経営論演習Ⅰ(経営戦略)／キャリア開発演習
専門：マーケティング／ワイン学

コ マツ ヤス ヒロ
● 小松 康弘 客員教授(野村総合研究所)

担当：広報企画論演習
専門：組織が担うコミュニケーションの役割と求められる機能

ツジ モト アツシ
● 辻本 篤 教授

担当：組織コミュニケーション論演習
専門：経営組織論

ワカ ナ タカ ヒロ
● 若菜 高博 客員教授(野村総合研究所)

担当：国際経営戦略広報論演習
専門：経営・事業戦略／グローバルSCM

ジャン
● 張ジュヒョク 准教授

担当：サービス産業広報論演習
専門：サービスマーケティング／消費者行動論

タ グチ タカ ノリ
● 田口 孝紀 客員教授(野村総合研究所)

担当：デジタル・コミュニケーション論演習
専門：企業のDX戦略／生成AI活用とリスク管理

データを読み解き、自分のアイデアで新たな価値

私の専門は説得的コミュニケーションです。インフルエンサーが消費者の意思決定や消費行動にいかに関与するか、健康やリスクに関する情報が人々の不安や信頼、さらに行動にどのように影響するのかわ、最先端の分析手法で探究しています。SNSやデジタルメディアが当たり前となった今、「誰の情報を信じ、どのように行動が変わるのか」をデータと理論の両面から解き明かしています。こうしたテーマを通じて、現代社会に直結する「実践的で使える知識」と「分析力」を身につけることができます。データを読み解き、社会の動きを理解し、自分のアイデアで新しい価値を生み出したい方にとって、刺激的な学びの場となるでしょう。

● オン・イーシユエン 准教授
担当：情報戦略論演習
専門：ソーシャルメディア／情報処理と消費行動

観光が国家・地域に及ぼす経済効果をどう高めるか

専門は観光経済、観光統計、観光政策、観光マーケティング等です。観光を産業、サイエンスの視点で捉え、制度設計や社会実装の方法を研究。特に観光が国家や地域に及ぼす経済効果を高めるための研究をしています。

運輸経済研究センター運輸政策研究所、エーシーニールセン・ジャパン、野村総合研究所を経て現職。野村総合研究所在任中に観光庁、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部に出向。現在は本学以外に北海道観光機構幹事、札幌地域観光創造推進委員会、公的機関の各種委員や民間企業のアドバイザー等を兼務しています。産官学すべてのセクターでの経験を活かし、観光分野における実践的で高度な社会課題を解決する能力を身につける授業を目指しています。

カミヤマ ヒロユキ
● 神山 裕之 教授
担当：観光マーケティング論演習
専門：観光マーケティング／観光経済

Public Communication and Journalism

公共ジャーナリズム専門科目

社会と市民、メディアと権力を問う

「公共性」「民主主義」「市民社会」「政治参加」「表現の自由」をめぐる思想・哲学系研究と、多様化するメディア空間のなかで市民に提供される情報やそのプロセスを考えるジャーナリズム研究から成ります。SNSやAIの時代、事実に基づく議論を前提としてきた民主主義は揺らぎ、社会の分断も深刻化しています。本専門科目では、政治学、社会学、法学、メディア学、思想史、地域研究などを横断し、思想・理論、史料、データ、社会調査、インタビューを通じて、社会・市民や政治・社会の関係性、メディアと権力などを問い直します。答えのない問いに向き合い、自分なりの答えを探究する学びの場です。

主な開講科目(すべて2単位)

公共文化論演習
市民社会論演習
メディア社会論演習
政治参加論演習
華語メディア論演習
政治コミュニケーション論演習
ジャーナリズム事例演習
調査報道事例演習
中国メディア論演習



Student's Voice

博士後期課程1年
包明珠さん
ホウミンジュさん

北海道で「味わう」多様性

私は中国内モンゴル自治区出身の留学生として、本学院の修士課程に入学し、現在は同じ学院の博士後期課程1年に在籍しています。修士課程で先生方の温かいご指導を受け、その経験が博士課程進学への後押しとなりました。

本学院には、日本・中国・韓国・欧米など多様な背景を持つ教員が在籍しています。さまざまな視点や研究方法に触れられる国際的な環境は、大きな魅力です。モンゴル人の留学生である私にとっても、自分の視点や研究テーマを真剣に受け止めてもらえる環境があることは、何よりの安心感につながっています。また北海道は自然が豊かで、食べ物もとてもおいしいです。特に乳製品や魚介類は日々の楽しみの一つです。豊かな自然と食に囲まれながら学べることも、北海道ならではの魅力だと感じています。

教員紹介 Faculty Profiles

カネ ヤマ ジュン
● 金山 準 教授

担当：市民社会論演習
専門：社会思想史

タカ ハシ アヤ
● 高橋 彩 教授

担当：国際交流論演習
専門：国際教育／留学生教育

サイトウ タク ヤ
● 斎藤 拓也 教授

担当：公共社会論演習
専門：政治思想史

シロ ヤマ ヒデ ミ
● 城山 英巳 教授

担当：中国メディア論演習
専門：現代中国研究／日中関係史

ウ カイシュン
● 于 海春 准教授

担当：政治コミュニケーション論演習
専門：政治コミュニケーション

シュ ジェンシュオ
● 許仁碩 准教授

担当：華語メディア論演習
専門：法社会学

マツ モト アヤ カ
● 松本 彩花 講師

担当：公共文化論演習
専門：政治学／政治思想史

ドイツ・ボランティア研究を通じて 多角的分析の視角を提供

ドイツのボランティア支援政策について研究しています。ドイツでは、ボランティアが民主主義的な社会に不可欠な存在として国家・社会の次元で理解され、ボランティアとしての活動そのものが「権利」と認識されています。その政治的理念を基盤に、誰もが参加できる制度の構築と、活動者の社会的安全の保障が進められてきました。そうした政策の蓄積によって、自らの待遇や不安定な地位について問題提起する「物言うボランティア」が日常の風景となっています。

授業では、市民による政治への参加、社会への参加を支えるために、政治と社会がどうあるべきかを議論します。また、個人の自発的な選択にもとづくさまざまな活動を検討するにあたり、背景にある構造的課題も含めた多角的な分析の視角を提供していきたいと考えています。

ワタナベ サト コ
● 渡部 聡子 准教授

担当：政治参加論演習
専門：ボランティア支援政策／現代ドイツ政治



シガキ コウイチロウ
志柿 浩一郎 准教授
担当：メディア社会論演習
専門：メディア研究／アメリカ研究

「アメリカ公共放送史」「解説型ジャーナリズム」を研究

公共ジャーナリズム専門科目は、公共性に関わるメディア・言論・社会的情報流通を扱い、報道、SNS、地域情報発信、市民参加、公共政策などを題材に、情報が人々や社会をどう動かすのかを考える領域です。私自身はメディア史、特にアメリカ公共放送史を専門とし、解説型ジャーナリズムやメディア法制も射程に入れて歴史的・比較的視点から探究してきました。

教育では「メディア社会論演習」を中心に、メディアと社会の関係をどう理解し研究するか、先行研究の整理の仕方も含めて学生とともに検討しています。また、本来の専門ではありませんが、長年の英語教育経験から、全学英語教育におけるAIによる音声評価の実践研究にも取り組んでいます。



Language and Communication

言語コミュニケーション専門科目

理論と実践から「ことば」の仕組みを多角的に研究

本専門科目では、音声・文法・意味・会話など「ことば」の仕組みを多角的に研究しています。例えば、外国語教育とそれを取り巻く社会環境、人間の脳がどのように文を組み立て、理解しているのか、会話における終助詞や敬語の使われ方、SNSや観光場面でのコミュニケーション、ナラティブとアイデンティティ、多文化社会における言語政策など、現代社会に関わるテーマを扱います。音声分析や会話データ、アンケート調査など多様な方法を用い、理論と実践の両面から言語コミュニケーションを探究する研究者および高度専門人材を養成します。

主な開講科目(すべて2単位)

言語習得論演習I	比較日本語論演習
言語習得論演習II	日本語伝達論演習
多言語相関論演習	日本語教育論演習
言語情報処理論演習	

Student's Voice

林 萌乃香 さん
ハシノノカ
修士課程2年

先生方との対話から見出した研究テーマ

言語教育の研究に興味があり、本学院を志望しました。入学当初、研究テーマを大幅に変更することになり、不安でいっぱいでした。しかし、様々な専門分野の先生方の親身なご指導のおかげで、通信制高校における英語科の実践に関するテーマにたどり着き、現在強い関心をもって研究に取り組んでいます。受験を乗り越えた先に、四季の移ろいを感じられる自然豊かなキャンパスと、温かい先生方に恵まれた研究生生活が待っています！

教員紹介 Faculty Profiles

オク サトシ
奥 聡 教授

担当：言語研究方法論演習
専門：理論言語学／比較統語論

アベ マコト
阿部 真 教授

担当：言語情報処理論演習
専門：第二言語習得／外国語教育

ノザワ シュンスケ
野澤 俊介 准教授

担当：日本語伝達論演習
専門：言語人類学／社会記号論

ハラ ユリエ
原 由理枝 教授

担当：多言語相関論演習
専門：形式意味論／語用論

ヒラ タミキ
平田 未季 教授

担当：言語応用論演習
専門：日本語教育／自然会話の分析

ト チョウシュン
杜 長俊 准教授

担当：言語コミュニケーション論演習
専門：会話分析／日本語教育

チョン ヘソン
鄭 惠先 教授

担当：比較日本語論演習
専門：日韓対照言語学／社会言語学

オオトモ ルリコ
大友 瑠璃子 准教授

担当：言語社会論演習
専門：社会言語学／言語の社会学

コンドウ ヒロム
近藤 弘 講師

担当：日本語教育論演習
専門：日本語教育学／ライフストーリー研究

コシ タカユキ
小西 隆之 准教授
担当：言語習得論演習I
専門：第二言語習得理論／言語リズム

学際研究としての言語研究

本学院の魅力の一つは学際性だと思います。私は教養学部出身で、言語学、心理学、音声学、教育学などを横断する学際分野である第二言語音声習得研究を専門としており、これまでに常に学際性を意識して研究教育活動を行ってきました。

本学院では、専門である第二言語習得および外国語教育分野だけでなく、広報、メディア、観光分野の研究指導にも積極的に携わっています。マーケティングやPR、コピーライティング、SNS運用などにおいては言語表現が重要な役割を担っており、言語学の理論的知見を活かすことで研究の可能性が広がります。学際研究を通して広く深く学べる本学院で皆さんをお待ちしています。

「ことば」の不思議を科学的に探求しよう

私は言語学を専門とし、理論言語学的なアプローチで主にロシア語を研究しています。特に形態論、統語論、意味論、およびそれらの境界領域における名詞、数詞、形容詞などの仕組みや性質に関心を持っています。本学院では対象言語を限定せず、あらゆる言語のさまざまな現象を理論的枠組みに基づいて研究する学生を広く指導しています。

担当授業では、言語理論が可能にする類型論的な視点を通じて、言語間の共通点や相違点を捉える力を実践的に養います。私たちが普段無意識に使っている「ことば」の背後には精巧な規則や体系が存在しており、それらを科学的に解き明かすのが理論言語学の面白さです。身近な「なぜ？」から始まることばの不思議を一緒に探求してみませんか？

ミヤウチ タクヤ
宮内 拓也 准教授
担当：言語習得論演習II
専門：統語論／意味論

Media and Culture

メディア文化専門科目

メディアの多様性を考える

メディアは、コミュニケーションの媒介だけでなく、特定の価値観を伝えることで、社会を見る私たちの認識を日々更新しています。メディアが様々な形を取り得る現在、これを理解する必要性は高まっていると言えるでしょう。本専門科目では、高度にデジタル化されたマルチメディアコンテンツのあり方、越境に伴う文化表象の変容、絵画・映像・雑誌・音楽・SNS等の諸メディアにおける表象の読み解き方、表象に見られるジェンダー・セクシュアリティ等を巡る価値観の揺らぎなど、メディアと文化の関係にかかわる多様な側面を考えていきます。

主な開講科目(すべて2単位)

ジェンダー社会文化論演習

芸術社会論演習

イメージ論演習

◆ The Body and Gender

文化実践論演習

表象文化論演習

◆ 英語ディプロマ・プログラム対象科目

Student's Voice

好奇心こそ研究への道標

メディア文化専門科目の講座には、常に開放的な雰囲気があります。ここで求められるのは正解ではなく、答えのない問いに向き合う姿勢です。映画や小説など、あらゆる表象が研究対象となり、好奇心が研究への道標となります。私は日本のボクシング映画における身体表象について研究し、異なる視点の授業から刺激を受けてきました。ここで過ごした時間、そして先生方から頂いた「面白い」という言葉は、私にとってかけがえのない宝物です。

修士課程2年
劉 李寒香 さん

教員紹介 Faculty Profiles

ヒョンム アン 教授
玄武岩 教授

担当: 文化越境論演習
専門: 政治社会学

トミナリ アヤコ 准教授
富成 絢子 准教授

担当: 言説分析論演習
専門: ディスコース分析/ジェンダー

ハラダ マミ 准教授
原田 真見 准教授

担当: ジェンダー社会文化論演習
専門: NZ女性史/NZ文化研究

カサイ アマネ 准教授
葛西 周 准教授

担当: 文化実践論演習
専門: 音楽学/表象文化史

マサダ ノリコ 准教授
増田 哲子 准教授

担当: 芸術社会論演習
専門: スペイン美術史(学院では表象文化研究全般)

デイ オツ 講師
丁乙 講師

担当: イメージ論演習
専門: 近代中国美学/比較美学

映像文化から見る ジェンダーとセクシュアリティ

映画という視覚メディアは、ジェンダーやセクシュアリティのコードといった社会規範を反映すると同時に、それらの規範を再構築する装置にもなり得ます。映画におけるジェンダー問題を考察するにあたり、フェミニズム映画理論やジェンダー・セクシュアリティ研究は重要な視座を提供してきました。

授業では、そうした批評理論を手がかりに、映画をはじめとするメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティ表象のあり方をとらえつつ、歴史的・社会的文脈の中でメディア文化を批判的に読み解く力を養います。

ジョギョク 徐玉 講師
担当: 表象文化論演習
専門: 映画研究/ジェンダー研究



AIは人間の認知をどう変えるのか

「これ、AIでしょ」と言われた「そば屋の出前」の写真は、戦前の東京で実際に撮影された新聞写真でした。生成AIは見てきたように嘘をつく。その通りですが、それは私たちの思い込みの裏返しでもある。AIの出現によって初めて、ヒトは己の認知バイアスを可視化することができるようになったのです。

私はデジタル技術・人文学・教育を横断し、AI技術が人間の認知やコミュニケーション、学びの在り方をどのように変え、意味世界をどう再編するのかを探究しています。AIが言語社会を拡張する時代にあって、言語とともにあるほかない人間は生活社会をどう生きるのか——その問いを軸に、メディアと文化、学びの未来を考えます。

タナベ タケシ 准教授
田邊 鉄 准教授
担当: マルチメディア表現論演習
専門: デジタル人文学/教育工学



観光創造研究コース



「観光／ツーリズム」を追究するための「4つの専門科目」

「観光創造研究」は、「観光／ツーリズム」の意義を追究し、持続可能な世界の成長と平和の実現に資する研究領域を構築していこうとする試みです。このような姿勢は、本学院のカリキュラムにおいても明確に示されています。観光創造研究コースにおける「観光文化」「交流共創」「観光地域経営」「国際観光開発」の4つの専門科目では、さまざまな学問領域を横断する学際的な授業が展開されています。

ここでは、本コースの多様性をご理解いただけるよう、それぞれの専門科目といくつかの演習授業を紹介します。

教員紹介 Faculty Profiles

● エデルヘ임 ヨハン 教授 担当：Tourist Attractions 専門：Tourism Teaching and Learning	● 岡本 亮輔 教授 担当：観光社会学演習 専門：観光文化とメディア	● 金ソンミン 教授 担当：ポピュラー文化論演習／音楽ツーリズム論演習 専門：音楽社会学／メディア文化研究
● 山村 高淑 教授 担当：北海道文化資源論演習 専門：地域社会開発論	● 張慶在 教授 担当：観光創造論演習 専門：多感覚観光／観光経験論	● 田中 英資 教授 担当：ヘリテージ論演習 専門：文化遺産研究／社会人類学
● 上田 裕文 教授 担当：ランドスケープ・デザイン論演習／森林美学演習 専門：造園学／風景計画学	● 天田 顕徳 准教授 担当：観光人類学演習 専門：観光人類学／宗教社会学	● 岡田 真弓 准教授 担当：コミュニティ・ベースド・ツーリズム論演習 専門：先住民文化と観光／文化遺産と観光
● 石黒 侑介 准教授 担当：インバウンド・ツーリズム論演習 専門：観光政策／観光地経営論	● 石野 隆美 講師 担当：観光文化論演習 専門：文化人類学／モビリティ研究	● 木村 宏 客員教授 担当：アドベンチャーツーリズム論演習 専門：観光施設運営／ロングトレイル
● 菅原 陽 客員教授 (JTB) 担当：観光地域ビジネス論演習 専門：観光地域づくり	● 中川 晶子 客員准教授 (JTB) 担当：観光地域ビジネス論演習 専門：観光を軸とした地方創生／観光マーケティング	

山岳観光をフィールドから捉える

観光地理を専門に日本やフランスの山岳を対象にしたリゾート発展プロセスや気候変動とツーリズムの関係を研究しています。日本国内では、近年、インバウンドの発展や気候変動の影響が顕著なスキー観光を事例とした研究を行ってきました。私自身も登山、スキーやパラグライダーを実践しながら実践者や地域住民と関わり、山岳観光をフィールドから考えています。授業では、地理学の視点から世界の観光目的地の形成や変容、ツーリズムの気候変動適応について教えています。私が担当する観光地理学演習には、訪日外国人の観光流動、リゾートでの労働、レジャー研究などに取り組む大学院生が参加しています。ぜひ一緒に新たな知を創っていきましょう。

● **吉沢 直** 講師
担当：観光地理学演習
専門：山岳ツーリズム



多文化共生の視点から移民受入れを考える

人口移動や移住の多様な形態を対象に研究しています。主な関心は、移住者による生活空間の形成と受入社会・国家との相互関係にあります。移住者と受入れ社会の相互作用を通じて新たな生活空間が生成される点において、交流共創論に直接関わる研究です。近年はロシア・日本・朝鮮半島間の移動に注目し、北海道北方のサハリン(樺太)を事例とした研究を行っています。また、日本に30年以上居住してきた経験を踏まえ、ロシアから日本や韓国へ移動した人々を対象にフィールドワークを行い、日常の実践や統合の経験について考察しています。授業では、多文化共生の視点から各国の政策や移民受入れを取り上げています。担当する多文化共生論演習には、ライフスタイル移住やディアスポラ形成などに取り組む大学院生が参加しています。多様な文化をより深く理解したい方の参加を歓迎します。

● **パイチャゼスヴェトラナ** 教授
担当：多文化共生論演習
専門：移民研究／樺太研究



観光を通じて地域の未来を創る

観光を通じて、地域の未来をどう創っていくのか。観光地域マネジメント(Destination Management)には、地域資源の発掘や商品化、プロモーション、観光施設の運営、交通や景観への配慮など、多面的な視点が求められます。また、多様なステークホルダーと協働しながら、その土地の価値を守り育て、持続可能なあり方を考えていくことも重要な役割です。観光団体や人材育成機関での実務経験も踏まえ、私の担当する観光地域マネジメント論演習では自治体等と連携したフィールドワークを重視し、現場で進められている観光事業の戦略や課題について考察します。観光地域づくりの望ましい姿、そしてそれを支える人や組織のあり方を、一緒に考えていきましょう。

● **小泉 大輔** 准教授
担当：観光地域マネジメント論演習
専門：観光地域づくり／観光人材育成



ヘリテージと観光の関係性を議論する

遺産(ヘリテージ)とは何でしょうか。第二次世界大戦後に設立されたユネスコの世界遺産条約は有名ですが、人々は何故ヘリテージに魅了され、そこを訪れるのでしょうか。国際社会の枠組みのなかで、日本も含めた各国は国際協力として世界の文化遺産保存に取り組んできました。また、日本の文化財保護法に基づく文化財保存活用政策も国際社会の影響を受けながら変化してきました。観光と文化遺産の関係は、常にその時の社会により、関係性を変えていきます。私が担当する文化遺産国際協力論演習では、「国民国家とは何か」から始まり、ヘリテージと観光の関係性を、国家、地域、ヘリテージについての基本文献を通して議論します。

● **田代 亜紀子** 准教授
担当：文化遺産国際協力論演習
専門：文化遺産観光／東南アジア地域研究



Culture and Tourism

観光文化専門科目

文化、歴史、社会との関わりの中で観光を学ぶ

観光を単なる移動や産業としてではなく、文化、歴史、コミュニティとの関わりの中で学ぶため、人々がそこで何を経験し、地域や社会といかなる相互作用が生じるのかを音楽、宗教、スポーツなど多様な事例から考えていきます。観光を文化的・社会的な視点から捉え、観光学に関する基礎知識を身に付け、観光のあり方や未来を構想する力を養います。

主な開講科目(すべて2単位)

観光文化論演習	◆ Tourism and Public History
観光社会学演習	◆ Tourist Attractions
観光人類学演習	観光創造論演習
北海道文化資源論演習	観光地理学演習
音楽ソールイズム論演習	

◆ 英語ディプロマ・プログラム対象科目



Intercultural Exchange and Co-Creation

交流共創専門科目

観光からみる人の共生と交流

人はなぜ移動するのでしょうか。グローバル化と多層化が進む言語・文化環境において、私たちは新たなコミュニケーションの形をデザインしていくことが求められています。多様なメディアを活用して異文化理解を推進することで交流人口が増大し、それが地域と観光を結びつけていきます。越境的な交流や協働に貢献するべく、観光における人の移動と、その交流が地域の発展にどのように結びつくのかを学びます。

主な開講科目(すべて2単位)

多文化共生論演習	森林美学演習
コンテンツツーリズム論演習	コミュニティ・ベースド・ツーリズム論演習



Student's Voice

北海道観光の実践力を得るために

私は、宿泊施設に関わる仕事を経験して感じた問題意識を研究として昇華させるため、またここ北海道の観光における実践力を得るために進学しました。本学院は、メディアや観光の第一線で活躍する企業の講義や、北海道諸地域へのフィールドワーク演習の機会が豊富に用意されています。また、ツアーコースの企画や事業提案といった、実務に直結するアウトプットを経験する機会もあります。研究力と実践力を共に高めたい方にとって、本学院は大きな学びの場となるはずです。

木村 太河さん
修士課程2年



Destination Management

観光地域経営専門科目

観光によるまちづくりを推進する

多様化する観光客に対応し、自地域をデスティネーション(観光目的地)として海外も含めた「外の視点」から客観的に分析し、地域経営を創出していくことが求められています。観光によるまちづくりを推進するために、自治体、企業、地域住民などの諸アクターの協働を図るにはどうしたらよいのか。地域復興、ランドスケープ、地域経済など、多角的視点から学びます。

主な開講科目(すべて2単位)

アドベンチャーツーリズム論演習
観光地域マネジメント論演習
ランドスケープ・デザイン論演習
◆ Tourism and Regional Revitalization
地域経済論演習

◆ 英語ディプロマ・プログラム対象科目



International Tourism Development

国際観光開発専門科目

観光に必要な国際的視座を養う

観光立国政策を受け、多くの外国人観光客が日本を訪れるようになり、アウトパウンドだけではなく、インパウンドの視点を考えることが重要になっています。また文化資源、文化遺産の分野では、人々が協力し合い、遺産と観光のバランスをとることが求められてきました。ローカル、ナショナル、グローバルなつながりのなかで観光をとらえることは、観光研究にとって必須の学びです。

主な開講科目(すべて2単位)

インパウンド・ツーリズム論演習	ヘリテージ論演習
国際開発論演習	文化資源マネジメント論演習
文化遺産国際協力論演習	



Student's Voice

理論とフィールドを通して学ぶ観光

札幌の綺麗なキャンパスで観光から広報・メディアまで広く学べるカリキュラムが整っている点で、本学院はとても魅力的です。歴史と観光に関心を持っていた私は、ヘリテージや観光を含めた幅広い分野に触れることができる本学院の環境に惹かれ、韓国から留学し、研究生を経て入学しました。本学院では、国際的な経験を持つ学生や先生方と交流しながら、理論とフィールドワークの両方を通して学ぶことができます。ぜひ本学院で、多様な学びに挑戦してみてください。

李 性殷さん
修士課程2年



観光創造の学びを深める実践環境

開かれた研究室

オープンラボ型フィールドプログラム

北海道大学が有する強力な産官学連携・国際ネットワークを活用し、学習・研究・実践のための「開かれた研究室」と位置付けた「オープンラボ型フィールドプログラム」を提供しています。フィールドワークと座学を往還しつつ、研究・事業の企画・立案から、実施、成果物作成、成果の社会還元まで一貫したアクティブラーニングの機会を提供し、地域・世界の課題解決に直接貢献できる人材を育成します。



森林美学演習(北海道大学 苫小牧研究林)



美瑛町での調査風景

©Akihiko Sato



北海道後志総合振興局での研修

自治体との連携

現場の熱量に触れる学び

観光創造研究コースの最大の特徴は、自治体との強力な連携による圧倒的なフィールドワークの質にあります。教室を飛び出して地域という「生きた教材」から実践的な学びを得ます。例えば「インバウンド・ツーリズム論演習」では、実際に美瑛町を訪れてオーバーツーリズムに関するアンケート調査を実施します。さらにその分析結果は町の「観光マスタープラン」に直接反映されるなど、大学院の学びが社会における実践に反映される経験を積むこともできます。他にも「コミュニティ・ベースド・ツーリズム論演習」は釧路市阿寒湖町で、「観光地理学演習」はニセコ町・倶知安町でそれぞれフィールドワークを行うなど、北海道の多様な地域を舞台にした学びが目白押しです。机上の空論ではない、現場の熱量に触れる学びがあなたを待っています。

企業との連携

実務と現場から学ぶ

観光創造研究コースでは、企業の第一線で活躍する実務家を講師として招聘し、社会や地域の現場に即した実践的な演習を展開しています。「観光地域ビジネス論演習」では、旅行業の枠を超えた「交流創造事業」を推進する株式会社JTBの最前線の取り組みを題材に、観光産業の構造変化や地域マネジメント、これからの観光ビジネスのあり方について考察します。さらに、「アドベンチャーツーリズム論演習」では、株式会社ゴールドウインによる講義やフィールドワーク等を通じて、アウトドアスポーツを通じたライフスタイル提案、地域と連携した施設運営や商品開発などを学び、自然環境や地域文化を活かした持続可能な観光のあり方を探究します。



JTBの実務家による実践的な授業



ゴールドウインと連携したニセコでの現地演習

履修証明プログラム

デスティネーション・マネージャー 育成プログラム 標準履修期間1年

本学院では、観光庁が推進する日本版DMO(デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション)や、今後DMOを目指そうとする関連組織の中核的人材の育成を目的に「デスティネーション・マネージャー」(*1)育成のための「履修証明プログラム」(*2)を開講しています。

プログラムでは、DMOの中心的な役割である観光地域マネジメントに関する講義のほか、地域資源の保全と持続的な活用のあり方、インバウンド観光の拡大を踏まえた国際観光マーケティング戦略など、多様なテーマの講義が数多く展開されています。社会人でも参加できるよう夜間や休日の集中講義も多数開かれており、1年間で136.5時間以上の講義を受講することで北海道大学総長名による「履修証明書(Certificate)」が交付され、所定の試験に合格すると「デスティネーション・マネージャー」の称号も授与されます。

(*1)デスティネーション・マネージャーは、北海道大学の登録商標です(商標登録:5940564号)。

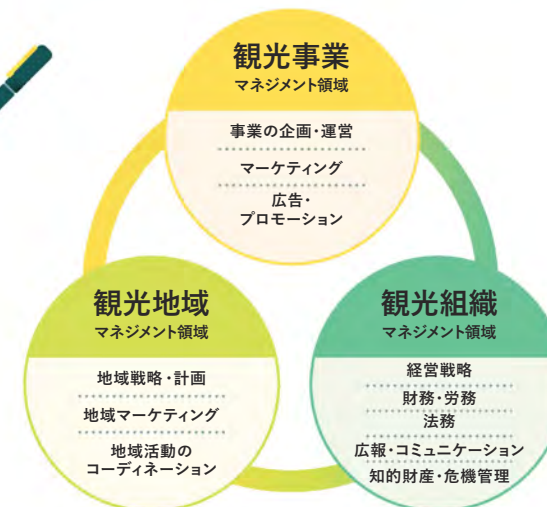
(*2)履修証明プログラムとは、文部科学省の履修証明制度に基づく社会人向けプログラムです。

Check!

このプログラムで学べること

3つのマネジメント領域を横断して学ぶ

観光地域づくりを推進するためには、誘客や商品造成だけでなく、地域の将来像を描き、多様な主体をつなぎ、組織を持続的に運営する力が必要です。本プログラムでは、3つのマネジメント領域を横断し、必要な知識と実践力を養います。



理論を地域の実践へ

大学院の正規科目と、本プログラム独自の実践講習を組み合わせたカリキュラムです。フィールドワーク、ケーススタディ、グループワークを通じて、実務家教員やゲスト講師と議論を重ね、学んだ知識を地域や組織の課題に結びつけます。履修の集大成として、DMOの事業計画づくりにも取り組みます。

立場を越えて学び合う

行政、観光協会、DMO、商工団体、NPO、観光関連事業者など、地域の現場に携わる社会人が、大学院の教員や学生とともに学びます。異なる地域・職種・経験が交わる対話は、自らの実践を捉え直し、修了後にもつながる学びのネットワークを育てます。



地域関係者へのプレゼンテーション



乃村工芸社による観光展示の企画実習



フィールドワークでのヒアリング調査

Modern Japanese Studies

現代日本学講座

現代日本の多様な側面を扱う英語プログラム

国際広報メディア研究コースおよび観光創造研究コースそれぞれの関連領域に、英語による専門科目を提供しています。これらの科目では、文化、社会、歴史、観光、身体、ジェンダー、移動などを手がかりに、現代日本の多様な側面を国際的・学際的な視点から学びます。また、共通科目「Modern Japanese Studies」を通じて、現代日本研究への基礎的な視座を養います。



文化人類学の視点で日本農村の伝統継承を調査

日本研究を専門的背景とし、文化人類学の視点から、近現代日本社会を対象とする質的調査・研究を行っています。これまで、農村地域における祭礼などの伝統の継承、地域活性化、観光、人生の意味、オルタナティブなライフスタイルなどをめぐる調査を進めてきました。近年は、ヨーロッパに移動する日本人にも注目し、国境を越えた移動経験や生活実践を明らかにする民族誌研究にも取り組んでいます。

担当科目「Tourism and Regional Revitalization」では、地域活性化、観光の変化、人口動態の影響について、具体的な事例と政策の両面から検討し、地域社会の変化を、観光や政策との関係から考える視点を養います。



● クリーンズザンネ 教授
担当: Tourism and Regional Revitalization
専門: Japanese studies, anthropology

実践型教育

第一線のコンサルタント・経営層による実務的授業

株式会社 野村総合研究所

実務的な観点も重視する本学院の特徴を打ち出すカリキュラムとして、野村総合研究所との連携協定の下、第一線で活躍するコンサルタント、経営層の方が3つの授業を提供しています。「デジタル・コミュニケーション論演習」では近年成長が著しいAIやDXなどのデジタル領域の動向を、「広報企画論演習」ではSDGsやサステナブルの観点を含む企業広報のあり方を、「国際経営戦略広報論演習」ではグローバルな観点からの企業戦略のあり方を学びます。



ベテランジャーナリストによる双方向授業

読売新聞社

調査報道の経験が豊富な読売新聞社のジャーナリストを講師に「ジャーナリズム事例演習」「調査報道事例演習」を開講しています。「SNSと政治」「AIとメディア」「データジャーナリズム」「ジェンダー報道」「国際報道」など様々なトピックを扱い、▽ジャーナリズムが日本や世界の問題を解決する道筋を提示しているか、▽いかに権力を監視しているか、▽市民の視点に立っているか、▽調査報道がいかに社会を動かすか——など多角的視点から講師と学生が双方向授業を展開します。大学院共通授業科目になっており、毎年、受講した北大院生の中からジャーナリストが生まれています。

広報・広告産業の最前線を知る

株式会社 電通

デジタル技術の進展やグローバル化により、広報・広告産業は大きな転換期を迎えています。企業と社会、メディア、消費者を結ぶコミュニケーションのあり方も、従来の広告発信にとどまらず、データ、テクノロジー、クリエイティブを組み合わせた多様な形へと広がっています。「広報・広告産業論演習」では、日本のコミュニケーションビジネスを牽引してきた電通の経営幹部を講師に迎え、広報・広告産業の現状と今後の展望について学びます。5名の経営幹部による集中講義を通じて、メディア・コミュニケーション産業の最前線に触れることを目的とします。



TLLP 海外大学との研究教育プログラム Tandem Language Learning Project

TLLPとは、シェフィールド大学(英国)、ヘルシンキ大学(フィンランド)、メルボルン大学(オーストラリア)等の海外大学との間で行われている研究教育の国際交流プログラムです。このプログラムは、①学生・教員を含めた双方の研究交流とネットワーク構築、②研究遂行のために必要となるアカデミックな言語スキルの獲得を目的としています。両大学の大学院生同士がペアを組み、オンラインで互いに相手の研究のサポートをするタンデム・ラーニングを行った後、相手の大学を訪問して成果報告、研究交流を行う「TLLPスタディセッション」を開催しています。



国際広報メディア・観光学院では 何を学べるのか

在学生座談会

多様な背景と研究テーマ

城山(司会): 本日はお集まりいただきありがとうございます。座談会を始めます。まずは自己紹介として、お名前、出身、現在の研究テーマを教えてください。

星野: 福岡で育ち、大学と就職後は東京で過ごしました。大学ではスラブ圏の言語や文化を学び、その後メーカーで首都圏の営業、データマーケティングに従事しました。数年後にその経験と大学での学びを生かせる仕事に挑戦したいと考え、国際協力機構(JICA)の海外協力隊に参加しました。2026年5月初めまでの2年間、バルカン半島のセルビアにある地方観光局に勤務しました。現在は、文化観光商品を扱うOTA(オンライン・トラベル・エージェンシー/オンライン旅行予約サイト)に関心を持っています。

て、再び北大で学ぶことにしました。現在は、複数のブランドや企業が連携して新たな価値を創出する「コ・ブランディング戦略」が、消費者購買行動にどのような影響を与えるのかを研究しています。

神奈川: 社会人学生として博士後期課程3年に在籍し、博士論文に取り組んでいます。2022年4月に修士課程に入学し、修了後、そのまま博士後期課程に進学しました。もともと東京で働いていましたが、2019年にスノーボードや観光への関心からニセコに移住し、観光実務に携わってきました。現在は、DMO(Destination Management Organization/観光地域づくり法人)を中心とした地方公共団体や地域事業者との協働による観光マネジメント体制をテーマとして研究活動に取り組んでいます。

吉井: 出身は北海道の白老町です。現在、具体的な研究テーマを検討している段階ですが、北海道という地域に注目し、その土地らしさを歌う音楽が人々の生活や移動、居場所、故郷へのイメージなどにどのような影響を与えるのかに関心を持っています。

陸: 上海出身です。2024年に大学を卒業し、研究生を経て、2025年4月に修士課程に入学しました。中国のSNS分析に関心を持っており、食品安全をめぐるリスク認知、感情評価に関する研究を進めています。

なぜ北大・本学院を選んだのか

城山: 北大、国際広報メディア・観光学院を選んだ理由を教えてください。

神奈川: ニセコへの移住が先にありました。外国人に人気のスキー観光地で働く中で、外から見える華やかなイメージとは異なり、旅行者のマナー、(主要な鉄道駅や空港などから最終目的地に移動するための)二次交通、雪道運転の事故など多くの地域課題があることを実感しました。こうした課題をどう解決するかを考える中で、観光政策や観光地マネジメントに関心を持ち、北大で学ぶことを選びました。現場で感じた「モヤモヤ」を学問として言語化し、理論と現場を往還させながら考えられる点に意義を感じています。将来的には、現場に根ざし

た大学教員を目指しています。

吉井: 生まれは愛知県ですが、生後まもなく北海道に移り、北海道で育ちました。家族が愛知から北海道に移ってきたというルーツもあり、「北海道とはどのような土地なのか」をもっと知りたいという思いがあります。また、自分が育った小さな町や北海道に何らかの形で恩返ししたいという気持ちがあり、音楽活動を通じて地域と関わってきました。自分が大事にしてきた音楽や地域とのつながりを、研究として確かめられる可能性があると感じ、この学院を選びました。

符: 交換留学時に北大で学び、雪やキャンパスの美しさ、研究環境に魅力を感じました。卒業論文でマーケティングを扱っていたこともあり、観光、メディア、広報、ジャーナリズムなど、複数の視点からマーケティングを学べるこの学院が、自分の関心と合致しました。外国人から見ても、北海道大学は日本のトップクラスの大学という印象があり、その点も魅力でした。

陸: 大学時代は中国で公務員を目指していましたが、コロナ禍を経て進路を考え直し、留学を選びました。この学院には、メディア研究や談話分析を専門とする先生がいて、自分の研究関心を広い視点から

考えられる環境があると感じました。さまざまな分野を横断して学べる点にも魅力を感じ、志望しました。

クラロ: 北見という外国人が少ない環境で育った経験から、日本社会や英語教育を異なる視点から見ようになりました。特に感じていたのは、日本の教育、とりわけ英語教育において、クリティカルシンキング(批判的思考)が十分に扱われていないのではないかという点です。メディアやクリティカル・リテラシー、英語教育を結びつけて研究できる環境として、この学院が自分に合っていると感じました。

星野: セルビアの地方観光局で働いていた際、地域に商機や可能性が見えても、それをどうマネジメントし、社会に還元していくかを考えるには専門知識が必要だと感じました。観光を大学院で学ぶなら北大という認識があり、観光とメディアを横断する研究ができること、地域や企業と関わる機会があること、そして北海道に住みたいという思いも含めて、この学院を選びました。

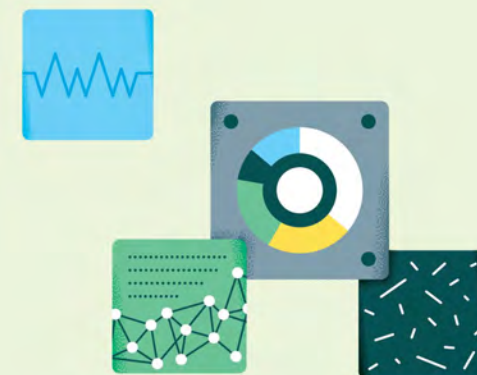
「メディア・観光の融合」 「理論と現場」の往還

城山: 国際広報メディア・観光学院の特徴は、「メディアと観光の融合」「理論と現場の往還」「社会との共創」です。皆さんの経験や関心をいかに研究テーマに結びつけているか、またこの学院での学びにどう繋げるかを聞かせてください。



星野: 入学したばかりですが、週末に授業の一環として知床にフィールドワークに行きました。知床国立公園などを訪れ、座学で学びつつ、実習を通して学べることは、課題に追われながらも楽しいと感じています。私は文化観光商品を扱うOTAを研究テーマとし、その実態調査や海外事例に関心を持って学んでいます。国際的に見ると、日本の伝統文化を体験する観光商品への需要は広がっている一方、日本国内では、その担い手が減少し、伝統文化そのものの需要も低下している面があります。そのミスマッチをつなぎ、伝統文化の継承に貢献するツールとして、OTAには可能性があると思っています。ただし、OTAを活用する際の課題や負の側面も含め、研究範囲をどう絞るかは検討中です。企業で働いていたときに、先輩から「相手の得意分野を見極める」という助言をいただきました。これは今も大切にしているアドバイスで、学院でもぜひ、先生方や学生それぞれの得意分野の力を借りて、学びを深めたいと思っています。

吉井: 「移動」「出会い」「居場所」「故郷」「応援」といった視点に関心を持っていま



す。カナダとイギリスへの留学経験は、語学力を高めるだけでなく、自分の将来やアイデンティティを考える契機になりました。また、大学時代を過ごした函館では、古民家シェアハウスで学生や若い人たちと共同生活をし、地域の人々と夏祭りや文化祭を運営しました。その中で、地域に貢献するだけでなく、地域の人々と一緒に何かをつくり、楽しむ経験から大きな影響を受けました。このように留学、音楽、多くの人との出会いを通じて、「誰かとの出会いの中で自分は変わる」という経験に強い関心を持つようになりました。人は観光や留学などを通じて、自分に何らかの刺激や変化を求めて移動するのではないかと考えています。その移動の原動力が他者との関わりとどのように結びつくのかを、応援、居場所、故郷などの視点から考えたいです。さらに、その中で芸術や音楽がどのような役割を果たすのかを、自身の経験と重ねながら探りたいです。ただし、具体的な研究テーマはまだ模索中であり、音楽だけに限定しすぎず、移動、出会い、観光、メディア、地域との関わりを広く捉えながら研究を進めたいと考えています。

クラロ: 吉井さんと同様に、音楽への関心があります。特に13～14歳の頃から、ヘヴィメタル系の中でも、デスメタルに近い声の出し方やギターのモチーフを用いる「デスコア」というジャンルに強く惹かれてきました。デスコアは、怒りや絶望などの感情をぶつける音楽であり、自身のアイデンティティ形成にも関わりました。北見という外国人が少ない環境で育ち、今振り返ると孤立感を抱えていたこと、自分への不安や日本社会への不満があったこと、また「外国人」と見なされる経験の中で、人と関わる際に壁を感じるがありました。その中で、デスコアは、自分では言葉にしていなかった内面の感情を代弁してくれる音楽でした。メタルを含む英語の音楽の歌詞には、反戦争、貧困格差などの社会的テーマ

を扱うものがあり、日本で英語を学ぶ学生にクリティカルシンキングの機会を与える教材になり得るのではないかと考えています。さらに、修士課程では音楽だけに限定せず、動画、漫画、コミックなども含む広い意味での英語メディアを対象に、その教育的可能性を考えていきたいです。

神奈川: 私の趣味であるスノーボード、フルマラソン、登山などのアウトドア活動が直接の研究テーマというわけではありません。ただ、訪れた地域でどのような観光地マネジメントが行われているかを見ることは、DMOや観光地マネジメントという研究の視点に有益です。「理論と現場の往還」で言えば、現場で得た知識がすぐに役立つわけではありませんが、後になって学問的知見が現場の理解につながることもあります。また、実務経験を通じて得た現場感覚を理論で捉え直し、その理論を再び現場で考えるという往還に価値を感じています。現場の課題を学術の場に持ち込み、批判的思考で解決を考えられる点に、学院の学びの意義を感じています。

留学生から見た 北大・学院の魅力とは

城山: 海外からの留学生と国内の学生が共に学び、多文化的な価値観を共有できる環境を大切にしたいと考えています。実際に学院には中国などからの留学生が多く、国際性豊かですが、留学生に勧められる北大や学院の魅力、実際の学生生活について教えてください。

符: 修士課程に所属しながら学部授業も受けられる点は魅力だと思います。たとえば、中国文学や鲁迅に関する授業を通じて、自分の国の文化を日本からの視点で学び直せる点は、北大ならではの良さだと感じています。部屋探しなどで支援を受けられ、周囲に海外からの留学生も多い



ため、来日前に心配していたほど寂しくはありませんでした。

陸: 学院にはさまざまな分野の先生がいるため、自分の専門にとどまらず、幅広い知識や方法論を身につけられます。生活面では上海のほうが便利だと感じることもありますが、北大や学院の学術環境は魅力です。海外から来た留学生にとって、雪はとても美しいものですが、冬の厳しさも認識しておいたほうがよいと思います。

改善すべき課題は何か…

城山: 国際広報メディア・観光学院で学んでいて、「ここは改善したほうがよい」という点があれば教えてください。あるいは「こうすれば、学生生活がさらに充実したものになる」という点があれば、ぜひお願いします。

神奈川: 留学生や多様な学生、先生がいる環境は恵まれています。コミュニケーションを取れる機会があまり多くはないため、自分から積極的にコミュニケーションを取りに行かないと、「学び」につながりにくいと感じます。先生方は親身に相談に乗ってくれますが、自分からアプローチしないと道は開けません。学生の主体性が求められます。

符: 日本人学生、中国人留学生、韓国人留学生などの間に見えない壁があり、授業を一緒に受けていても交流やコミュニケーションが少ないと感じます。学生同士が自然に話せる機会を増やせるとよいと思います。

星野: セルビア滞在中に受験し、オンライン説明会では先生方が親身に対応してくれて助かりました。一方で、海外や遠方にいる学生、社会人学生にとって学びやすくなるよう、オンライン受講などの体制がさらに整うとよいと思います。

クラロ: 北大全体について言えば、大学院生がサークルや学生コミュニティに入りにくい場合があり、大学院生も参加しやすい仕組みがあるとよいと感じます。また学院については、学生同士や先生と出会えるイ

ベント、今回のような座談会の機会がもつとあると思います。留学生や日本人学生が交流できる場があれば、さらに良い環境になると思います。

吉井: さまざまな学部出身であったり、背景を持ったりする学生が在籍していることは、多様性という点で強みです。一方で、観光や研究に関する基礎知識、学術的文脈の共有が不足しやすいとも感じています。入学後に学びを深められる環境はありますが、合格から入学までの期間に、大学院での学び方や基本的な知識を広げられる機会があるとよいと思います。

受験生へのメッセージ

城山: 最後に、この学院を受験される方へのメッセージをお願いします。

神奈川: 社会人学生の立場から言えば、社会に出てから学び直したい人、現場で感じている課題を体系的・学問的に考え直したい人におすすめです。現場での課題を、批判的思考を通じて捉え直し、創造的な解決につなげていくことが、この学院で学ぶ大きな意義だと思います。

符: 自分が持っている関心を大切にしてほしいです。入学時点で研究テーマが完全に固まっていなくても、入学後に授業を受けたり、さまざまな先生と相談したりする中で、研究テーマを固めていけば大丈夫です。留学生も、孤独や不安を心配しすぎる必要はありません。安心して学べる、緩やかな環境が学院にはあります。

陸: 雪景色が好きな人、多様な国や地域から来た人と交流したい人、自分の専門だけにとどまらず幅広い知識や方法論を身につけたい人には、この学院は向いていると思います。自分のやりたいことを大切にしながら、ぜひ挑戦してみてください。

星野: 入学前に聞いていた通り、「観光」を多様な切り口から学べると日々実感しています。歴史、観光史、思想、統計、マーケティングなど、幅広い観点から学べることに加え、社会人学生とともに学べる環境もユ

ニークで刺激的です。迷っている人は、先生方がオープンで相談しやすいので、まずはメールなどで少し聞いてみるとよいと思います。

吉井: 学院名が「国際広報メディア・観光学院」であるように、「観光」にとらわれない学びができます。入学後、自分が「観光」だと思っていたものが良い意味で壊され、視野が広がる経験をしています。また、観光の要素が豊かに詰まった北海道という土地で学ぶことで、現場と大学での学びが接続する機会も多いと感じています。ぜひ一緒に学びましょう。

クラロ: 表現が少し強いかもしれませんが、受験する方には「覚悟」を決めてほしいと思います。自分の関心がまだややもやしていても、少なくとも「これだけはやりたい」という核の一つ持っていてほしいです。入学後は、それまで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなる経験をする可能性もあります。ただ、先生方は本当に些細なことでも相談に乗ってくれる方々で、幅広く学べます。自分の関心が非常にニッチなものであっても、しっかり受け止めてもらえる環境なので、期待を持って受験してほしいと思います。

城山: 本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(2026年6月12日、国際広報メディア・観光学院「ひろば」にて)

Profile 座談会メンバー 紹介

国際広報メディア研究コース
修士課程2年(国際広報)

フ シュンアン
符 駿安さん

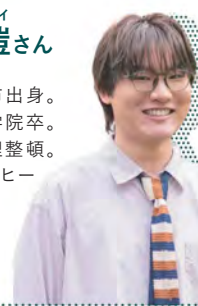
中国上海市出身。
上海海洋大学卒。
趣味はカフェ巡り。
雪景色を見ながらコーヒーを飲む時間が好き。



国際広報メディア研究コース
修士課程2年(公共ジャーナリズム)

リク セイガイ
陸 晟愷さん

中国上海市出身。
国際関係学院卒。
特技は整理整頓。
趣味はコーヒーを飲むこと。



国際広報メディア研究コース
修士課程1年(メディア文化)

クラロ・ブランドン・ジョンさん

カナダ・フランスにルーツを持つ。
北海道北見市で育つ。弘前大学教育学部卒。



観光創造研究コース
博士後期課程3年

カ ナ ガワ ヤス ユキ
神奈川 靖如さん

埼玉県出身。法政大学デザイン工学部建築学科卒。東京での社会人経験を経てニセコに移住。趣味は国内外の登山、スノーボ、フルマラソン。



観光創造研究コース
修士課程1年

ホシ ノ ミ ナミ
星野 海波さん

福岡で育つ。東京外国語大学卒。食品メーカー勤務を経て、JICA海外協力隊として2年間セルビアの地方観光局で勤務。趣味はキャンプ、トレッキングなどアウトドア全般。



観光創造研究コース
修士課程1年

ヨシ イ
吉井 さつきさん

北海道白老町で育つ。北海道教育大学函館校卒。趣味はギターとピアノの弾き語り。



修了生の主な就職実績一覧

令和元(2019)年度～令和7(2025)年度

■ = 国内企業・国内機関 ■ = 海外企業・海外機関

修士課程修了生

● 情報サービス・通信・IT

NECソリューションイノベータ、日本タタ・コンサルティング・サービスズ、NRIシステムテクノ、日本電気、富士通、NTTドコモ、富士フイルムメディカルITソリューションズ、日本アイ・ピー・エム デジタルサービス、日本アイ・ピー・エム、楽天グループ
Huawei Technologies Co., Ltd. (華為技術有限公司、中国)、Meituan (美团、中国)、NetEase, Inc. (網易、中国)、NetEase Youdao (Hong Kong) Limited (香港)

● 広告・広報・メディア・コンテンツ

北海道新聞社、電通PRコンサルティング、テムジン
Kuro Games (庫洛遊戲、中国)

● 旅行・観光・航空・交通

AIRDO、JTB、JTBコミュニケーションデザイン、日本旅行、日本旅行北海道、中部国際空港、九州旅客鉄道、全日本空輸、公益財団法人日本交通公社、北海道エアポート、星野リゾート、星野リゾート・マネジメント、日本航空、大阪高速電気軌道 (Osaka Metro)
台湾観光協会 (台湾)、The St. Regis (Marriott Internationalブランド、海外)、四川省旅行社投資集団 (中国)

● コンサルティング・シンクタンク

アクセンチュア、アビームコンサルティング、デロイト トーマツ コンサルティング合同会社、NTTデータ経営研究所、三菱総合研究所、船井総合研究所
埃森哲 (中国) 有限公司 (Accenture (China) Co., Ltd.)

● 製造・メーカー

JFEスチール、アイシン、ディスコ、コニカミノルタ、東芝、パナソニックコネクト、パナソニック、キリンホールディングス、ルネサスエレクトロニクス、アイリスオーヤマ、富士電機、日立パワーソリューションズ、河合楽器製作所
Honda Motorcycle (Shanghai) Co., Ltd. (本田摩托車銷售 (上海) 有限公司、中国)、Olympus (Beijing) Sales & Service Co., Ltd., Shanghai Branch (中国)、大金空調技術 (中国) 有限公司 (中国)、積水 (上海) 国際貿易有限公司 (中国)

● 小売・外食・生活関連サービス

日本マクドナルド、ニトリ/JD.com, Inc. (京東、中国)

● 商社・卸・運輸・郵便

日本郵便

● 金融・保険

オリックス生命保険/Bank of China Limited (中国銀行股份有限公司、中国)

● 建設・不動産

大和ハウス工業、オープンハウスグループ

● 教育・大学・研究機関

北海道大学、東京国際大学、北海道教育委員会

● 公務・団体・国際機関

一般社団法人日本自動車連盟、北海道庁、独立行政法人日本貿易振興機構、独立行政法人国際交流基金

博士後期課程修了生

● 大学教員・研究職・高等教育機関

北海道大学、北海道教育大学、岡山大学、静岡県立大学、東洋大学、立命館大学、拓殖大学、北星学園大学、札幌学院大学、札幌国際大学、藤女子大学、岐阜大学
Irkutsk State University (ロシア)、河北大学 (中国)、長春工業大学 (中国)

● 公務・団体・研究支援

外務省

修了生の活躍

ファン研究、アニメコラムニストとしても活躍

観光創造専攻(当時)の博士後期課程で山村高淑教授の指導を受け、ポップカルチャーファンが自身の嗜好するコンテンツを動機として行うファン実践の〈移動〉に関する研究を行いました。おそらく他の大学・指導教員のもとでは研究として完成させるのが難しかったと思われるテーマでしたが、背中を押していただきました。国際的な学術領域にまで視野を広

げられたのは学院の環境があったからで、今から振り返ると本当に恵まれていたと思います。博士課程修了後、大学教員として観光学やファン研究に携わり、またアニメコラムニストとして実務にも従事しています。本学院での学びを活かし、今後も日本国内外で活動の場をさらに広げていきたいです。

[プロフィール]

アニメコラムニスト、北海道大学観光学高等研究センター研究員。自身の好きなアニメと、研究・実務経験を活かし、産学官が関わる多領域で活躍中。



コアライ リョウ
小新井 涼さん

2024年度博士後期課程修了
宮城学院女子大学
現代ビジネス学科
准教授

企業広報担当の今、学んだことが活かされる

企業広報担当の今、学んだことが活かされる

観光資源が豊富な北海道です。国際広報メディア・観光学院はフィールドワーク等の研究に存分に取り組むことができます。また、大学内や札幌市内の身近な観光資源について調査を行ったり、広報やメディアについても学んだりできるため、私自身の視野を広げる期間となりました。教員の皆さんはもちろんのこ

と同級生の方々も様々な経験や着眼点を持っているので助け合いながら研究を進めることができました。

私は現在、北海道の企業で広報を担当し、企業の地域活動や観光振興に関わっています。社内外の様々な方と接点を持つようになって感じることは、大学院で学んだ広報・メディア・観光といういずれの要素も生かされているということです。貴重な経験ができ、研究にも取り組みます。興味がある方はぜひ入学してください。

専攻の延長「記者」として挑戦し続ける

コロナ禍で世界中が停滞していたかのようなその数年間に、わが学院は気前良く、私という一個人にブランクなく前へ進む機会を与えてくれました。海外SNSにおける世論の調査研究をテーマに、知見豊かな指導教員と出会い、広大な北海道の大地を背景に四季の移ろいの中で、とりわけ長く厳しい冬の雪に鍛えられながら、心が解きほぐされる2年間の学生生活を過ごせました。興味に導かれるまま学内の幅広い科目か

ら選択履修し、諸先生方の示唆に富む教養を手がかりに、自ら多面的かつ多様な知の地平へと歩み寄ることができたと感じます。

これらの経験と思い出は、再び社会へ踏み出した現在の私を支える確かな力であると同時に、ふと立ち止まり心を休めることのできる桃源郷でもあります。今は道内において専攻の延長線上にある実践的な仕事に従事し、学院で身につけたものを生かしながら、時折感じる自身の限界を乗り越え、局面の打開に挑戦し続けています。



キョセイ
許静さん

2023年度修士課程修了
十勝毎日新聞社記者



研究センター紹介

東アジアメディア研究センター



国境を越えた連帯と共感を追求

メディア・コミュニケーション研究院の附属組織として2009年に設立された東アジアメディア研究センターは発足以来、東アジアのジャーナリズム、大衆文化、人権、平和にかかわる国境を越えた連帯と共感を追求して相互理解と交流を積み重ねてきました。国内外の研究組織と連携して開催する国際シンポジウムや講演会では、教員だけではなく学生も参画して情報発信する場を提供しています。センターには学術研究員が常駐し、資料の貸し出しも行っています。学生の皆さんはぜひ、センターの活動に参加し、その資産を活用してください。

メディア・ツーリズム研究センター



メディアと観光が交差する現象を学際研究

メディア・ツーリズム研究センターは、2017年にメディア・コミュニケーション研究院附属の研究センターとして設立されました。メディアと観光が交差する現象を学際的に研究し、デジタル化やグローバル化による文化、コミュニケーション、人々の移動やアイデンティティの変化を多角的に探究しています。また、国内外の研究者との連携を通じて国際的な共同研究を推進し、新たな知的ネットワークの形成と社会への貢献を目指しています。現在は「平和観光」「拡張現実」「宗教とツーリズム」「ヘリテージ」を中心テーマとして、分野を超えた研究活動と教育支援にも積極的に取り組んでいます。

学生相談室

充実した学生生活へのサポート体制

学生相談室は、学業や進路、対人関係、心身の不調など、皆さんの「困った」という声に耳を傾け、解決の糸口を一緒に見つけていく場所です。6階の静かで見晴らしの良い部屋で、まずは胸につかえていることを話してみませんか。自分のペースで対話を重ねることで、悩みや気持ちが整理され、新しい方向性が見えてくることもあります。より充実した学生生活を送れるようサポートしますので、どうぞ気軽にお越しください。



IMCTS

Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies

学生募集要項

課程(標準修業年限)	入学定員	授与する学位
修士(2年)	47	修士(国際広報メディア)／修士(観光学)／修士(学術)
博士後期(3年)	12	博士(国際広報メディア)／博士(観光学)／博士(学術)

入試情報

- 修士課程の入学者の選抜は、研究計画書、活動レポート、成績証明書、筆答試験、口述試験、英語外部試験スコアシート等を総合して行います。
- 博士後期課程は、研究計画書及び口述試験が中心です。
- 募集は一般、社会人、留学生に分けて行います。また、長期履修制度が準備されています。

入試日程

修士課程前期入試	8月(4月入学)
修士課程後期入試	2月(4月入学)
博士後期課程入試※	2月(4月入学)

※2月入試で定員に満たなかった場合、8月入試(10月入学)を実施します。

英語試験について(修士課程入試)

英語学力判定は、TOEFL(iBTまたはITP)／TOEIC(公開テストのみ)等のスコアにより判定します。詳細については本学院ウェブサイトで公開しています。

入試説明会(オンライン)

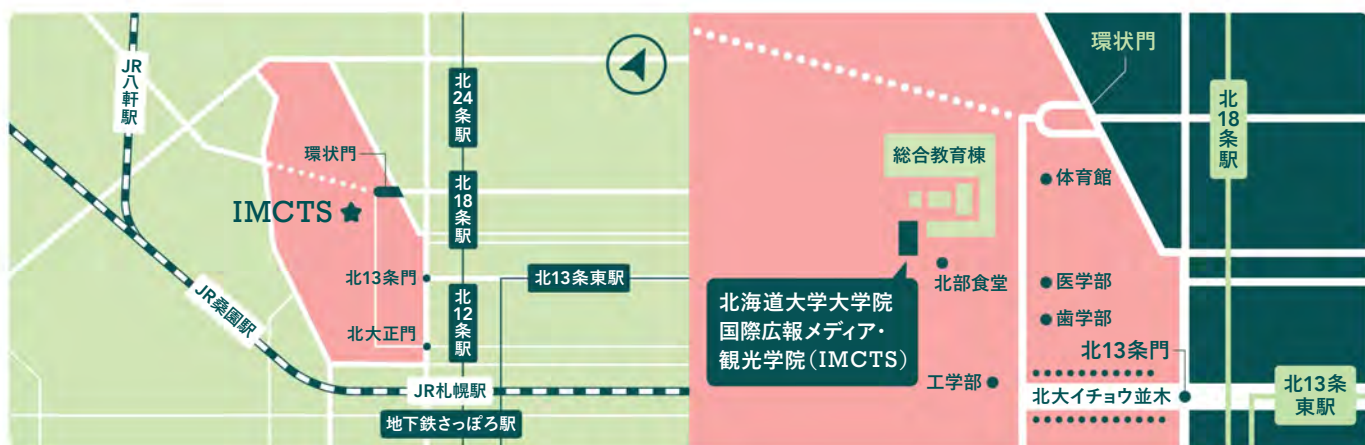
本学院では年2回、入試説明会をオンラインで実施しています。学院(修士・博士後期課程)の最新入試情報、専門科目別の教員との個別相談、在学生との交流セッションなど、盛りだくさんのプログラムを用意しています。

第1回説明会

5月下旬

第2回説明会

10月下旬～11月上旬



北海道大学大学院
国際広報メディア・観光学院

北海道大学メディア・観光学事務部教務担当
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
MAIL nyuushi@imc.hokudai.ac.jp
<https://www.imc.hokudai.ac.jp>



150th
HOKKAIDO UNIVERSITY

制作／シオリグラフィック 発行／2026年8月